流浪の旅　西行法師が千鳥ケ瀬　足を休めて　歌を詠む

平安時代末期の僧西行は各地を旅し歌を詠んだ。伊勢本街道沿い相可高校前にある千鳥ケ瀬は西行が千鳥の歌を詠んだことで名付けられた。

平安時代の終わり頃。もと朝廷を守る武士だった西行は二十三歳で出家し、仏道修行とともに歌を詠み諸国をめぐりました。

旅のお坊さんで各地の伝説に一番多く登場するのは弘法大師空海ですが、その次に多いのがこの西行です。

僧空海はよい行いをした村人に湧き水を出してあげるという弘法水のお話が多いのですが、西行法師は歌にまつわるお話です。

相可高校前、千鳥ケ瀬は櫛田川へ流れ込む小川、太木川のほとりです。西行が千鳥の歌を詠んだことからついた名だといいます。

疲れぬる　我を友呼ぶ　千鳥の瀬
越えて　相可に　旅寝こそすれ

先に宿を探しに行った友の知らせを待つ西行の歌です。今ある歌碑は明治になってから建てられたものです。

野中にも西行法師が桜の杖を突き立てると枝が下に伸びて逆さに花が咲いたという言い伝えがあり、逆さ桜、歌納木桜と呼ばれました。野中に歌納木という姓があります。

神坂の金剛座寺のご詠歌は西行作と伝わり、相可に西行という小字があります。

西行が晩年を暮らしたという西行谷は二見か宇治か二つの説がありましたが、今は二見説が有力です。

暦師いた 賀茂杉大夫の 丹生暦

古くから朝廷が独占してきた暦が地方でも作られるようになった。丹生の賀茂杉太夫家が作っていた丹生暦は伊勢暦ができるまで、伊勢神宮の御師が全国に土産として配っていたもの。

暦は朝廷の陰陽寮という役所で作られ、書き写されて役所や諸国に配られていました。やがて天皇の力が弱まると、暦博士の賀茂氏が直接供給するようになり、地方には暦が行き渡らなくなりました。

室町時代後期の16世紀後半、賀茂家の後継ぎが絶えたため暦道を土御門家が一時兼ねるようになりました。

やがて武士が力を持つようになると地方でも暦を求める人が多くなり、読みやすい仮名を使った仮名暦が版木に彫られ、摺暦が大量に出来るようになりました。

享禄5年（一五三二）、丹生の賀茂杉太夫が伊勢国司北畠晴具から暦師として安堵（地位や権利を保障）されているので、この頃から丹生暦は作られていたと思われます。

同じ名字ですが丹生の賀茂杉太夫家と京都の暦博士賀茂氏との関係はわかっていません。

丹生暦は寛永8年（一六三一）に伊勢暦が作られるまで、伊勢神宮の御師が全国に土産として配っていたことで知られています。

柱に貼れる縦長の略暦と、五枚の紙を貼り合わせた横長の頒暦の二つがありました。

残念ながら版木は略暦の一枚しか残されていません。

六角堂 登録された郡役所

旧町役場敷地内にあった六角堂は大正天皇即位記念に多気郡役所の物産陳列所として建てられたものとみられる。役場が現庁舎へ移転の際、現在地へ移築された。2015年登録有形文化財に。

役場の駐車場の片隅にある六角堂と呼ばれる建物はもと多気郡役所の物産陳列所といわれています。

郡は大正10年まで行政機関でしたから、郡の中心である相可に郡役所があったのです。

屋根が頂点から傘のように広がる六角形の建物のてっぺんには唐獅子の飾り瓦があり、土台の瓦製の露盤に「紀念館」の文字が読み取れます。郡役所があった時期から考えるとこの紀念は大正天皇の即位記念にあたりそうです。当時、日本中で祝賀の記念行事や建築などが行われたのでした。

玄関のつもりで軒先へ入り見上げると空が(?)。六角堂の軒先と思ったのは屋根がある門のような別の建物でした。これは元多気郡役所だった旧多気町役場の玄関部分だけを切り取ったもの。六角堂とともに役場庁舎移転の翌年昭和53年に現在地に移築されました。

辺の長さが四間の正方形。その手前の二つの角を切り取った形の建物ですから入口部分以外は普通の四角い部屋に見えます。町内で出土した土器や瓦などの発掘品の一部を保存しています。

平成27年、国の登録有形文化財になりました。

わかれ道
道標見て
伊勢参り

伊勢本街道、熊野街道、和歌山別街道などの要路が通る多気町には道標のような石造物が数多くある。地元の人々は功徳を願い参詣者のために道しるべや常夜灯を建てた。

江戸時代になると庶民も旅をすることが増え、多気町を通る伊勢本街道、熊野街道、和歌山別街道なども整備されるようになります。

街道沿いに今も残る石の道しるべや夜道を照らす常夜灯は旅人が道に迷わないように地元の人々が功徳を願い建てたものです。

伊勢本街道は奈良や大阪方面から伊勢神宮にお参りする人が多く通った道です。

伊勢へ七度熊野へ三度と信仰心のあつさをいうことわざがあるように、せめて一生に一度は伊勢参宮をしたいという気持ちは江戸時代の人々には共通のもので、特に着の身着のまま、無一文で旅ができるおかげ参りがおよそ60年ごとに流行したと伝えられています。

熊野街道は伊勢参宮を終えた人たちが、続けて熊野三山への参詣に向かう道でした。

和歌山別街道はこの地域が江戸時代紀州藩の領地であったため、城代が置かれた松坂や田丸から高見峠を越えて和歌山へと通じる道でした。

街道沿いだけでなく、多気町の石造物の数は数えきれないくらいですが、今は風化して読めないものもたくさんあります。

友好を キャマスの生徒と 深めあう

多気町へのシャープ三重工場進出をきっかけに関連事業所がある米国ワシントン州キャマス市と姉妹都市提携を結んだ。国際交流基金を設け国際交流活動を行っている。

平成七年（一九九五）、多気町にシャープ株式会社の液晶工場、三重工場が完成しました。関連会社もでき、大規模住宅団地、相可台が造成されたのもこの時です。

シャープ株式会社の進出をきっかけに平成七年、同社の関連事業所がある米国西海岸ワシントン州の人口二万人の都市キャマス市と友好都市提携を結びました。

同市は州の南部にあり、南はコロンビア川を挟みオレゴン州に接しています。大小の湖がある大変景観の良い所で、市内には製紙・パルプ産業をはじめ多くの工業が進出しています。

同市と多気町は、相互訪問を続けており、青少年を中心に広く町民が参加できる国際交流活動に取り組んできました。

この交流活動をきっかけに平成9年（一九九七）、多気町国際交流協会が設立され、異文化を理解し交流を進めることや国際意識を高め世界に開かれたまちづくりを目的に活動を続けています。

現在、台湾の金華国民中学校とも交流を進めています。

また、国のJETプログラムにより、多気町にも国際交流員（CIR）と外国語指導助手（ALT）が配属され国際化に貢献しています。

盆の夜
かんこ踊りは
五桂 五佐奈

伊勢地方では太鼓(羯鼓)を持って踊るかんこ踊りが盛んであった。当町の五桂と五佐奈では、火振り踊りと併せて今も盆の夜に行われる。

多気町の五桂と五佐奈でお盆の夜に行われるかんこ踊りは新仏や祖先の供養のための踊りで、どちらも火振り踊りと併せて行われます。

かんこ踊りが今も行われているのは三重県がほとんどですが、県内でも昔はもっと多くのかんこ踊りが行われていたようです。

腰蓑を着け、頭に馬の尾毛でつくったシャグマをかぶったるかんこ踊りが有名ですが、紙の花で飾った長い竹を何本も背中につけたり、何もつけず、白装束だけのところもあり、地域によっていろいろですが腰につける名前の由来の羯鼓は共通です。

五桂と五佐奈の踊り手の衣装は青を基調とした粋でいなせな紺ばっちですが、五佐奈の火振り踊りだけはシャグマを被ります。

五桂では「東西東西御踊りしっぽり頼みます」の声で始まり鉦や太鼓、ほら貝などの音にあわせて両手で羯鼓をうちならして踊ります。

勢和地区でもかつては多くの字で行われていましたが、昭和一八年(一九四三)の車川を最後に行われなくなりました。

三重県は昭和33年(一九五八)に地域を定めず「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」としてかんこ踊を選択。伊勢市と松阪市の計五か所のかんこ踊りが県の無形民俗文化財に指定されています。